泥濘

梶井基次郎

一

それはある日の事だった。——

待っていた為替が家から届いたので、それを金に替えかたがた本郷へ出ることにした。

雪の降ったあとで郊外に住んでいる自分にはその雪解けが億劫なのであったが、金は待っていた金なので関わずに出かけることにした。

それより前、自分はかなり根をつめて書いたものを失敗に終わらしていた。失敗はとにかくとして、その失敗の仕方の変に病的だったことがその後の生活にま

でよくない影響を与えていた。そんな訳で自分は何かに気持の転換を求めていた。金がなくなっていたので出歩くにも出歩けなかった。そこへ家から送ってくれた為替にどうしたことか不備なところがあって、それを送り返し、自分はなおさら不愉快になって、四日ほど待っていたのだった。その日に着いた為替はその二度目の為替であった。

　書く方を放棄してから一週間余りにもなっていただろうか。その間に自分の生活はまるで気力の抜けた平衡を失したものに変わっていた。先ほども言ったように失敗が既にどこか病気染（じ）みたところを持っていた。

書く気持がぐらついて来たのがその最初で、そうこうするうちに頭に浮かぶことがそれを書きつけようとする瞬間に変に憶い出せなくなって来たりした。読み返しては訂正していたのが、それもできなくなってしまった。どう直せばいいのか、書きはじめの気持そのものが自分にはどうにも思い出せなくなっていたのである。こんなことにかかりあっていてはよくないなと、薄うす自分は思いはじめた。しかし自分は執念深くやめなかった。また止まらなかった。やめた後の状態は果してわるかった。自分はぼんやりしてしまっていた。その不活潑な状態は平常経験す

るそれ以上にどこか変なところのある状態だった。花が枯れて水が腐ってしまっている花瓶(かびん)が不愉快で堪(たま)らなくなっていても始末するのが億劫で手の出ないときがある。見るたびに不愉快が増して行ってもその不愉快がどうしても始末しようという気持に転じて行かないときがある。それは億劫というよりもなにかに魅せられている気持である。自分は自分の不活潑のどこかにそんな匂いを嗅(か)いだ。

　なにかをやりはじめてもその途中で極(きま)って自分はぼんやりしてしまった。気がついてやりかけの事に手は帰っても、一度ぼんやりしたところを覗(のぞ)いて来た自分

の気持は、もうそれに対して妙に空ぞらしくなってしまっているのだった。何をやりはじめてもそういうふうに中途半端中途半端が続くようになって来た。またそれが重なってくるにつれてひとりでに生活の大勢が極ったように中途半端を並べた。そんなふうで、自分は動き出すことの禁ぜられた沼のように淀（よど）んだところをどうしても出切ってしまうことができなかった。そこへ沼の底から湧（わ）いて来る沼気（メタン）のようなやつがいる。いやな妄想（もうそう）がそれだ。肉親に不吉がありそうな、友達に裏切られているような妄想が不意に頭を擡（もた）げる。

　ちょうどその時分は火事の多い時節であった。習慣

で自分はよく近くの野原を散歩する。新しい家の普請が到るところにあった。自分はその辺りに転っている鉋屑（かんなくず）を見、そして自分があまり注意もせずに煙草の吸殻を捨てるのに気がつき、危いぞと思った。そんなことが頭に残っていたからであろう、近くに二度ほど火事があった、そのたびに漠とした、捕縛されそうな不安に襲われた。「この辺を散歩していたろう」と言われ、「お前の捨てた煙草からだ」と言われたら、なんとも抗弁する余地がないような気がした。また電報配達夫の走っているのを見ると不愉快になった。妄想は自分を弱くみじめにした。愚にもつかないことで本当

に弱くみじめになってゆく。そう思うと堪らない気がした。

何をする気にもならない自分はよくぼんやり鏡や薔薇（ばら）の描いてある陶器の水差しに見入っていた。心の休み場所――とは感じないまでも何か心の休まっている瞬間をそこに見出（いだ）すことがあった。以前自分はよく野原などでこんな気持を経験したことがある。それはごくほのかな気持ではあったが、風に吹かれている草などを見つめているうちに、いつか自分の裡（うち）にもちょうどその草の葉のように揺れているもののあるのを感じる。それは定かなものではなかった。かすかな気配

ではあったが、しかし不思議にも秋風に吹かれてさわさわ揺れている草自身の感覚というようなものを感じるのであった。酔わされたような気持で、そのあとはいつも心が清すがしいものに変わっていた。

鏡や水差しに対している自分は自然そんな経験を思い出した。あんな風に気持が転換できるといいなど思って熱心になることもあった。しかしそんなことを思う思わないに拘らず自分はよくそんなものに見入ってぼんやりしていた。冷い白い肌に一点、電燈の像を宿している可愛い水差しは、なにをする気にもならない自分にとって実際変な魅力を持っていた。二時

三時が打っても自分は寝なかった。

夜晩（おそ）く鏡を覗（のぞ）くのは時によっては非常に怖（おそ）ろしいものである。自分の顔がまるで知らない人の顔のように見えて来たり、眼が疲れて来る故か、じーっと見ているうちに醜悪な伎楽（ぎがく）の腫（は）れ面（おもて）という面そっくりに見えて来たりする。さーっと鏡の中の顔が消えて、あぶり出しのようにまた現われたりする。片方の眼だけが出て来てしばらくの間それに睨（にら）まれていることもある。しかし恐怖というようなものもある程度自分で出したり引込めたりできる性質のものである。子供が浪打際で寄せたり退（ひ）いたりしている浪に追いつ追われつしな

がら遊ぶように、自分は鏡のなかの伎楽の面を恐れながらもそれと遊びたい興味に駆(か)られた。

自分の動かない気持は、しかしそのままであった。鏡を見たり水差しを見たりするときに感じる、変に不思議なところへ運ばれて来たような気持は、却(かえ)って淀(よど)んだ気持と悪く絡まったようであった。そんなことがなくてさえ昼頃まで夢をたくさん見ながら寝ている自分には、見た夢と現実とが時どき分明しなくなる悪く疲れた午後の日中があった。自分はいつか自分の経験している世界を怪しいと感じる瞬間を持つようになって行った。町を歩いていても自分の姿を見た人が「あ

んな奴が来た」と言って逃げてゆくのじゃないかなど思ってびっくりするときがあった。顔を伏せている子守娘が今度こちらを向くときにはお化けのような顔になっているのじゃないかなど思うときがあった。——しかし待っていた為替はとうとう来た。自分は雪の積った道を久し振りで省線電車の方へ向った。

二

お茶の水から本郷へ出るまでの間に人が三人まで雪で辷(すべ)った。銀行へ着いた時分には自分もかなり不機嫌

になってしまっていた。赤く焼けている瓦斯煖炉（ガスだんろ）の上へ濡れて重くなった下駄をやりながら自分は係りが名前を呼ぶのを待っていた。自分の前に店の小僧さんが一人差向かいの位置にいた。下駄をひいてからしばらくして自分は何とはなしにその小僧さんが自分を見ているなと思った。雪と一緒に持ち込まれた泥で汚（よご）れている床を見ているこちらの目が妙にうろたえた。独り相撲だと思いながらも自分は仮想した小僧さんの視線に縛られたようになった。自分はそんなときよく顔の赧（あか）くなる自分の癖を思い出した。もう少し赧くなっているんじゃないか。思う尻（しり）から自分は顔が熱くなって

来たのを感じた。

係りは自分の名前をなかなか呼ばなかった。少し愚図過ぎた。小切手を渡した係りの前へ二度ばかりも示威運動をしに行った。とうとうしまいに自分は係りに口を利(き)いた。小切手は中途の係りがぼんやりしていたのだった。

出て正門前の方へゆく。多分行き倒れか転んで気絶をしたかした若い女の人を二人の巡査が左右から腕を抱えて連れてゆく。往来の人が立留って見ていた。自分はその足で散髪屋へ入った。散髪屋は釜を壊(こわ)していた。自分が洗ってくれと言ったので石鹸で洗っておき

ながら濡れた手拭（てぬぐい）で拭くだけのことしかしない。これが新式なのでもあるまいと思ったが、口が妙に重くて言わないでいた。しかし石鹸の残っている気持悪さを思うと堪（たま）らない気になった。訊（たず）ねて見ると釜を壊したのだという。そして濡れたタオルを繰り返した。金を払って帽子をうけとるとき触って見るとやはり石鹸が残っている。なんとか言ってやらないと馬鹿に思われるような気がしたが止めて外へ出る。せっかく気持よくなりかけていたものをと思うと妙に腹が立った。友人の下宿へ行って石鹸は洗いおとした。それからしばらく雑談した。

自分は話をしているうちに友人の顔が変に遠どおしく感ぜられて来た。　また自分の話が自分の思う甲所（かんどころ）をちっとも言っていないように思えてきた。　相手が何かいつもの友人ではないような気にもなる。　相手は自分の少し変なことを感じているに違いないとも思う。不親切ではないがそのことを言うのが彼自身怖（おそ）ろしいので言えずにいるのじゃないかなど思う。　しかし、自分はどこか変じゃないか？　などこちらから聞けない気がした。「そう言えば変だ」　など言われる怖ろしさよりも、　変じゃないかと自分から言ってしまえば自分で自分の変な所を承認したことになる。　承認してしま

えばなにもかもおしまいだ。そんな怖ろしさがあったのだった。そんなことを思いながらしかし自分の口は喋(しゃべ)っているのだった。

「引込んでいるのがいけないんだよ。もっと出て来るようにしたらいいんだ」玄関まで送って来た友人はそんなことを言った。自分はなにかそれについても言いたいような気がしたがうなずいたままで外へ出た。苦役(くえき)を果した後のような気持であった。

町にはまだ雪がちらついていた。古本屋を歩く。買いたいものがあっても金に不自由していた自分は妙に吝嗇(けち)になっていて買い切れなかった。「これを買うく

らいなら先刻のを買う」次の本屋へ行っては先刻の本屋で買わなかったことを後悔した。そんなことを繰り返しているうちに自分はかなり参って来た。郵便局で葉書を買って、家へ金の礼と友達へ無沙汰の詫を書く。机の前ではどうしても書けなかったのが割合すらすら書けた。

　古本屋と思って入った本屋は新しい本ばかりの店であった。店に誰もいなかったのが自分の足音で一人奥から出て来た。仕方なしに一番安い文芸雑誌を買う。なにか買って帰らないと今夜が堪らないと思う。その堪らなさが妙に誇大されて感じられる。誇大だとは

思っても、そう思って抜けられる気持ではなかった。先刻の古本屋へまた逆に歩いて行った。やはり買えなかった。吝嗇臭いぞと思ってみてもどうしても買えなかった。雪がせわしく降り出したので出張りを片付けている最後の本屋へ、先刻値を聞いて止した古雑誌を今度はどうしても買おうと決心して自分は入って行った。とっつきの店のそれもとっつきに値を聞いた古雑誌、それが結局は最後の選択になったかと思うと馬鹿気た気になった。他所の小僧が雪を投げつけに来るのでその店の小僧はその方へ気をとられていた。覚えておいたはずの場所にそれが見つからないので、まさか

店を間違えたのでもなかろうがと思って不安になってその小僧にきいてみた。

「お忘れ物ですか。そんなものはありませんでしたよ」言いながら小僧は他所（よそ）のをやっつけに行こう行こうとしてうわの空になっている。しかしそれはどうしても見つからなかった。さすがの自分も参っていた。足袋を一足買ってお茶の水へ急いだ。もう夜になっていた。

　お茶の水では定期を買った。これから毎日学校へ出るとして一日往復いくらになるか電車のなかで暗算をする。何度やってもしくじった。その度（たび）たびに買うの

と同じという答えが出たりする。有楽町で途中下車して銀座へ出、茶や砂糖、パン、牛酪（バター）などを買った。人通りが少い。ここでも三四人の店員が雪投げをしていた。堅（かた）そうで痛そうであった。自分は変に不愉快に思った。疲れ切ってもいた。一つには今日の失敗（しくじ）り方が余りひど過ぎたので、自分は反抗的にもなってしまっていた。八銭のパン一つ買って十銭で釣銭を取ったりなどしてしきりになにかに反抗の気を見せつけていた。聞いたものがなかったりすると妙に殺気立った。

ライオンへ入って食事をする。身体を温めて麦酒（ビール）を飲んだ。混合酒（カクテル）を作っているのを見ている。種々な酒

を一つの器へ入れて蓋をして振っている。はじめは振っているがしまいには器に振られているような恰好をする。洋盃（グラス）へついで果物をあしらい盆にのせる。その正確な敏捷（びんしょう）さは見ていておもしろかった。

「お前達は並んでアラビア兵のようだ」

「そや、バグダッドの祭のようだ」

「腹が第一滅っていたんだな」

ずらっと並んだ洋酒の壜を見ながら自分は少し麦酒の酔いを覚えていた。

三

ライオンを出てからは唐物屋で石鹸を買った。ちぐはぐな気持はまたいつの間にか自分に帰っていた。石鹸を買ってしまって自分は、なにか今のは変だと思いはじめた。瞭然(はっきり)りした買いたさを自分が感じていたのかどうか、自分にはどうも思い出せなかった。宙を踏んでいるようにたよりない気持であった。

「ゆめうつつで遣(や)ってるからじゃ」

過失などをしたとき母からよくそう言われた。その言葉が思いがけず自分の今為(し)たことのなかにあると思った。石鹸は自分にとって途方もなく高価(たか)い石鹸で

あった。自分は母のことを思った。
「奎吉(けいきち)……奎吉！」自分は自分の名を呼んで見た。悲しい顔付をした母の顔が自分の脳裡(のうり)にはっきり映った。――三年ほど前自分はある夜酒に酔って家へ帰ったことがあった。自分はまるで前後のわきまえをなくしていた。友達が連れて帰ってくれたのだったが、その友達の話によると随分非道(ひど)かったということで、自分はその時の母の気持を思って見るたびいつも黯然(あんぜん)となった。友達はあとでその時母が自分を叱った言葉だと言って母の調子を真似てその言葉を自分にきかせた。それは母の声そっくりと言いたいほど上手に模(も)して

あった。単なる言葉だけでも充分自分は参っているところであった。友人の再現して見せたその調子は自分を泣かすだけの力を持っていた。

模倣（もほう）というものはおかしいものである。友人の模倣を今度は自分が模倣した。自分に最も近い人の口調はかえって他所から教えられた。自分はその後に続く言葉を言わないでもただ奎吉（けいきち）と言っただけでその時の母の気持を生（い）きいきと蘇（よみが）えらすことができるようになった。どんな手段によるよりも「奎吉！」と一度声に出すことは最も直接であった。眼の前へ浮んで来る母の顔に自分は責められ励まされた。——

空は晴れて月が出ていた。尾張町から有楽町へゆく鋪道（ほどう）の上で自分は「奎吉！」を繰り返した。

自分はぞーっとした。「奎吉」という声に呼び出されて来る母の顔付がいつか異（ちが）うものに代っていた。不吉を司（つかさど）る者――そう言ったものが自分に呼びかけているのであった。聞きたくない声を聞いた。……

有楽町から自分の駅まではかなりの時間がかかる。駅を下りてからも十分の余はかかった。夜の更（ふ）けた切り通し坂を自分はまるで疲れ切って歩いていた。袴（はかま）の捌（さば）ける音が変に耳についた。坂の中途に反射鏡のついた照明燈が道を照らしている。それを背にうけて自分

の影がくっきり長く地を這(は)っていた。マントの下に買物の包みを抱えて少し膨(ふく)れた自分の影を両側の街燈が次には交互にそれを映し出した。後ろから起って来て前へ廻り、伸びて行って家の戸へ頭がひょっくり擡(もちあが)ったりする。慌(あわただ)しい影の変化を追っているうちに自分の眼はそのなかでもちっとも変化しない影を一つ見つけた。極く丈の詰った影で、街燈が間遠になると鮮(あざや)かさを増し、片方が幅を利かし出すとひそまってしまう。「月の影だな」と自分は思った。見上げると十六日十七日と思える月が真上を少し外れたところにかかっていた。自分は何ということなしにその影だ

けが親しいものに思えた。

　大きな通りを外れて街燈の疎（まば）らな路へ出る。月光は初めてその深祕さで雪の積った風景を照していた。美しかった。自分は自分の気持がかなりまとまっていたのを知り、それ以上まとまってゆくのを感じた。自分の影は左側から右側に移しただけでやはり自分の前にあった。そして今は乱されず、鮮かであった。先刻自分に起ったどことなく親しい気持を「どうしてなんだろう」と怪しみ慕（なつか）しみながら自分は歩いていた。型のくずれた中折を冠り少しひよわな感じのする頸（くび）から少し厳（いか）った肩のあたり、自分は見ているうちにだんだ

んこちらの自分を失って行った。

影の中に生き物らしい気配があらわれて来た。何を思っているのか確かに何かを思っている——影だと思っていたものは、それは、生（なま）なましい自分であった！

自分が歩いてゆく！　そしてこちらの自分は月のような位置からその自分を眺めている。地面はなにか玻璃（はり）を張ったような透明で、自分は軽い眩暈（めまい）を感じる。

「あれはどこへ歩いてゆくのだろう」と漠とした不安が自分に起りはじめた。

……

路に沿うた竹藪（たけやぶ）の前の小溝（こみぞ）へは銭湯で落す湯が流れ

て来ている。湯気が屏風（びょうぶ）のように立騰っていて匂いが鼻を撲（う）った——自分はしみじみした自分に帰っていた。風呂屋の隣りの天ぷら屋はまだ起きていた。自分は自分の下宿の方へ暗い路を入って行った。

底本：「檸檬・ある心の風景」旺文社文庫、旺文社
１９７２（昭和47）年12月10日初版発行
１９７４（昭和49）年第４刷発行
初出：「青空」青空社
１９２５（大正14）年７月
入力：j.utiyama
校正：野口英司
１９９８年９月12日公開
２００９年10月１日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。